

ウェルビーイングって、なんだ？⑦ なぜ今、wellbeingが注目されているか？

“経済的な豊かさ=幸せ”ではない成熟社会で、多様な価値観を持つ人々が求める「実感としての豊かさや幸せ」

かつて、人々の幸せは、経済的な豊かさと同義のように捉えられ、主にGDPなどの「量」の指標が幸せを示すものとして使われてきました。

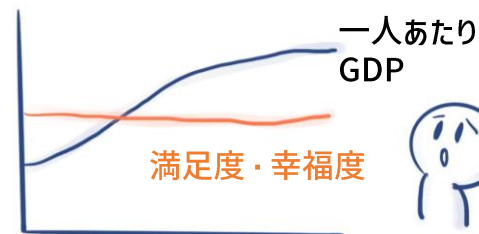
確かに、経済的な豊かさは、幸せの大きな要因の一つと考えられます。

しかし、一定程度の経済水準に達すると主観的な幸福感と関連しなくなること（※右記参照）や、経済的価値の優先による、格差、環境問題などの社会課題の深刻化など、財とサービスの「量」だけでは、生活の豊かさや幸せを測れないという問題意識が高まり、主観的な幸せやその測定に関して、各国・国際機関等で様々な研究が進展してきました。

また、成熟した社会において、価値観の変化や生き方の多様化なども、一人ひとりの主観的な幸せが重視される背景となっていると考えられます。

加えて、新型コロナが心身の健康や幸せのあり方を改めて問い直す機会となったことや、現在のように先行きの予測がつかない不透明な状況で、変わらない拠り所が求められていることも、「ウェルビーイング」に注目が集まっている理由であると考えられます。

※幸福のパラドックス



※経済学者リチャード・イースタリンが提唱した、一定程度の経済成長に達するとGDP上昇と幸福感は関連しないとする説

GDPは伸びていても、人々の幸せが同じように伸びているわけではないということですね。

日本の名目GDPは世界第3位でも、国連の「[World Happiness Report2022](#)」によると、幸福度は世界第54位なんですね。



個人の所得に関しても、年収7万5000ドル付近までは収入の大きさと幸福度は関連するものの、それ以上収入が増えても幸福度は頭打ちとなるという研究結果があります。また、内閣府の「満足度・生活の質に関する調査」でも、総合主観満足度は、世帯年収2000万円～3000万円で頭打ちになる、という傾向があるようです。

経済的な豊かさだけでなく、いろいろな要素が結びつき、お互いに影響し合って、人の幸せ、ウェルビーイングにつながっていくんだね。



そういう「幸せ」を測るのは難しそうだけど、国連、OECDなどの機関や、国内外の様々な研究者、各国の政府などが、色々な調査・研究に取り組んでいますね。

ウェルビーイングは各国・地域の政策にも位置づけられ始めています。日本では、「骨太の方針2019」から「well-being」が登場しているし、デジタル田園都市国家構想もwell-beingに着目しているね。

民間企業も働き方改革、人材確保、グローバル化、持続性などの観点から、「ウェルビーイング経営」を掲げるところが増えてきたね。

(参考) 内田由紀子「これからの幸福について 文化的幸福観のすすめ」(新曜社)
内閣府「満足度・生活の質に関する調査」に関する第4次報告書
Sustainable Development Solutions Network 「World Happiness Report2022」